

「七つのパンと小さな魚が少し」

2014年09月12日

マルコによる福音書8章1節～10節。

パンと魚の奇跡は四つの福音書全てに書かれている。マルコ福音書は6章と8章に、二回も書いている。弟子たちにとって、印象深い喜びの出来事であったからであろう。6章と8章の記述は、同じような出来事であるが、数字が多少違っている。6章では「五つのパンと二匹の魚」、群衆は「男が五千人」、残ったものは「12籠」であった。8章では「七つのパンと小さな魚が少し」、群衆は「およそ四千人」、残ったものは「7籠」となっている。聖書では、数字はオーバーに表現されている。少ないもので、大勢が満腹したということである。主イエスから、愛し共に生きよという説教を聞いた群衆は、持ってきた弁当を惜しげもなく、分かち合い満腹した。「神の国」の現実を体験したのである。

ヨハネ福音書6章の記述は興味深い。主イエスは、何をしようとしているかを知っていたが、フィリポを試みるため「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と問われた。フィリポは、群衆を見渡し「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分（200日分の賃金）のパンでは足りないでしょう」と、正確な現状判断に基づき、できっこありませんと答えている。二人の会話を聞いていたアンデレが「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」と言っている。一人の少年が、人のよさそうなアンデレに、持ってきた自分の弁当を差し出したのであろう。アンデレも桁が違うので「何の役にも立たないでしょう」と無駄と思いつつも、申し出ている。しかし、アンデレの申し出を受け、主イエスの祝福に与り、群衆は食べて満腹した。喜んだ彼らは、主イエスを王にするため、連れて行こうとした。飢え渴いた民衆は、腹一杯食べさせてくれる人を王にしたいと思ったからである。理解できる。しかし、主イエスは王になる思いは全くなく、十字架で死ぬことによって、人間に罪の赦しという「生の絶対的是認」を与えることに向かっていた。ひとり山に退かれたと記している。パンと魚の奇跡は、分かち合って「神の国」を実体験した喜びを伝えている。

現在の日本で、子どもたちの6人に1人が、貧しさのために十分な食事がとれていないと言われている。スーパーやコンビニでは賞味期限を過ぎた食べ物が大量に捨てられている。この矛盾を何とか、埋められものかと思う。服部茂幸氏が『アベノミクスの終焉』を著し、貧富の格差について下記のように書いている。「格差が大きな国では、精神病や麻薬が広がる。国民の間で肥満が広がり、不健康になり、平均寿命は縮まる。人々の中の協力関係がなくなり、経済学の言葉で言う「社会的資本」が破壊される。教育レベルは低下し、十代の少女の妊娠が増加する。犯罪も増加する。こうして社会を荒廃させるのである。」

世界の人口は増加している。食料不足は目に見えている。秘密裡に行われているTPP交渉は強い者が有利になるような仕組みを作ろうとしているのではないか。食料の争奪戦は深刻になる。パンと魚の奇跡は社会的弱者を支えなさい、そしてグローバル化した世界においても、分かち合う道筋をつけなさいという今日的メッセージとして受け止めるべきではないか。聖書は古代の突拍子もない寓話ではなく、今の問題に鋭く問いかけている。